

二〇二三年三月二五日

春雨に俾夫の駈けゆく渡月橋
子供らの声に北窓開きけり
たゆとふやまばらとなりし残り鴨
日をはじくなずな畑に蝶屯
ひと雨に芽吹く銀杏や御堂筋
履き慣らす登山シューズに初音聞く
野菜畑砦のごとくほとけの座
園うらら一期一会の花談義

二〇二三年三月二四日

猫の首あち見こち見や春の蠅
拌みつつ食ふ仏壇の桜餅
満開の桜が似合ふ陸軍墓地
囀りや散歩のペアの二本杖
茎立や今も変はらぬ三角田
リハビリの足元縫ひて初蝶来

二〇二三年三月二三日

ワイパーの切る雨粒や戻り寒
店頭に魚を焼きて春うらら
春雨の水輪の下に錦鯉
茎立や畑から見ゆ母の墓
船過ぎり水面の桜くづれけり
椎茸のコマ打つ音のこだませり
野良猫に尻尾巻く犬花菜道
春雨にテールランプの滲む道

二〇二三年三月二二日

ネオン街色とりどりや春の雨
手作りの野菜も並ぶ梅見茶屋
カリヨンの高鳴る空を鳥帰る
支払ひはいつでもよろし島長閑
暦年の苔むす幹や臥竜梅

凡士
たか子
もとこ
あひる
凡士

素秀
ひのと
ぼんこ
こすもす
うつき
なつき

豊実
満天
むべ
うつき
ひのと
みきお
もとこ
みきえ

あひる
みづき
凡士
ひのと
明日香

徒長枝の一枝添へある梅見膳
カラフルな力士幟や街の春
春寒の息吹きかけて判子押す

二〇二三年三月二一日

乗り換へのホームに花菜畑展け
新しき板塔婆増ゆお中日
露座観音辛夷の白をまぶしめり
火渡りの生木泡ふく彼岸祭
曳航の水脈きらめきて暮れのこる
春愁やブログ更新出来ぬまま
春泥や農家の庭の深轍
舷に映りし波の綾うらら
ひとひらの花びら付けて苺食ぶ

二〇二三年三月二〇日

杏咲く家目印と訪ねけり
自転車を畦に押しゆく彼岸僧
春耕の土脹らませ脹らませ
踏青や仏花彩る閑伽の水
齋道不即不離なる老夫婦
部屋籠り詮無き雨の彼岸かな
少年と見しは少女や青き踏む
春愁や乗換えホーム間違えて
合格と一言だけの電話かな

二〇二三年三月一九日

呼び鈴に手櫛一かき木の葉髪
パドックの馬の毛艶や風光る
会釈して春泥の道ゆづりあふ
春暁や漁解禁の船溜り

みづき
こすもす
ひのと

凡士
明日香
はく子
千鶴
凡士
たか子
うつき
ひのと
あひる

ふさこ
素秀
千鶴
ぼんこ
むべ
もとこ
ひのと
こすもす
ひのと

たかを
はく子
ひのと
凡士

毎日句会みのる選・二〇二三年三月二七日